

## 参考文献

- 『日本古代中世人名辞典』  
平野邦雄／他編 吉川弘文館 2006年
- 『昭和人物事典—戦前期—』  
日外アソシエーツ株式会社／編 日外アソシエーツ 2017年
- 『大西民子 歳月の贈り物』  
田中あさひ／著 短歌研究社 2015年
- 『花溢れみき—大西民子歌集—』  
大西民子／著 短歌研究社 1971年
- 『自解100歌選 大西民子集』  
大西民子／著 牧羊社 1986年
- 『まぼろしは見えなかった』  
さいたま市立大宮図書館／編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『万葉集—はじめに和歌があった(NHK「100分de名著」ブックス)』  
佐佐木幸綱／著 NHK出版 2015年
- 『埼玉の万葉集—野山に流れた古歌を求めて—』  
藤倉明／著 野外調査研究所 2014年
- 『こんなにも面白い万葉集』  
山口博／著 PHP研究所 2019年
- 『日本全国万葉の旅 西日本・東日本編』  
坂本信幸／他著 小学館 2015年
- 『和歌文学大系3 萬葉集3』  
久保田淳／監修 明治書院 2006年
- 「俳句とエッセイ」昭和58年4月号  
牧羊社

2020.1.16 発行  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1  
電話 048-643-3701

## 企画展 大西民子と『万葉集』

1	原稿(謄写版刷り)「万葉集東歌と埼玉」
2	原稿(謄写版刷り)「万葉集と東歌」
3	原稿(謄写版刷り)「万葉集の現代的意義」
4	大西民子所蔵本 鴻巣盛広著『万葉集全釈』
5	民子の手作りの和装本『萬葉集概説』
6	原稿(謄写版刷り)「万葉植物作品抄」
7	原稿「印持ため 人には拇印 捺さしめて 経理のさまの むごきことあり」
8	写真(複製) 万葉植物園での民子
9	埼玉県立文化会館発行「萬葉植物園のしおり」
10	埼玉県立文化会館発行「万葉植物園」のしおり

## 常設展 大西民子の生い立ち

1	民子の第四歌集『花溢れみき』
2	短冊「結末を みづからも知らぬ 物語 書きつぎて二人を 今日逢はしむ」
3	原稿「報復は 神がし給ふと 決めをれど 日に幾たびも 手をわが洗う」
4	原稿「つぎ目より ステンドグラスは 割るるならむ 思ひてをれば 何か慰む」
5	民子愛用の硯箱

## 万葉植物園

1955(昭和30)年、大宮公園内にあった埼玉県立文化会館(注1)の敷地内に、万葉植物園は開園しました。

武蔵野の風景が残る大宮公園に、万葉集に出てくる植物を集めた植物園を作ってはどうか、という声が地元の植物愛好家から寄せられたことが開園のきっかけだったと民子はっています。

海藻以外の万葉植物が集められ、園丁専門の職員たちの手により植物園は順調に発展していき、数年後には、「紫」や「かんあおい」といった栽培の難しい草花もよく育つようになりました。その様子は、植物学者からも「日本一になりましたね」と認められるほどだったそうです。

注1・・・現在の埼玉県立歴史と民俗の博物館の場所に建っていた施設

## 大西民子と万葉植物園

大西民子は岩手から夫とともに1949(昭和24)年に大宮に移住し、夫の恩師の紹介で、夫婦そろって埼玉県立文化会館で働きだしました。

文化会館の事務や広報誌の仕事に携わっていた民子ですが、万葉植物園開園の計画が動き出すと、高等師範学校時代に国文学を勉強した経験をかわれて、植物園の管理や広報の仕事の担当を任せられました。

植物園のパンフレットの作成や、万葉植物のほとりの立て札に墨汁で歌を書く仕事をしていた民子は、当時のことを「高等師範学校で習った国文学が、こんな風に役にたったのは意外だったが、学生時代に習った知識を呼び戻し、懸命に取り組んだ」とっています。

思い出深い植物として、民子は三極<sup>みつまた</sup>のことをエッセイで書いています。三極は、春に万葉植物園で最初に咲く花で、それは冬枯れの園が活気づいてくる合図のように感じた。来園者のなかには、三極の花を見ようとわざわざ訪れる人もいて、花に手を触れては春の訪れを楽しんでいたとっています。

また秋になると、植物園では萩の花が一面に咲いて、美しい日本の情緒が漂う光景だったそうです。

民子は、この萩の立て札に「秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩が花見に」(萩の花盛りになったと聞いたので、馬をつらねて花を見に行こう)という歌や、「秋萩におきたる露の風吹きて落つる涙はとどめかねつも」(萩の花の露が風にとめどもなくこぼれるように、あなたを思う私の涙もとどまることがない)といった歌を書いて、貴公子たちが馬を連れ萩の花を見に行く様子や、愛しい人の事を想う奥ゆかしい女性の姿といった古代の風景に思いを馳せていたそうです。

民子はかつて教師をしていたこともあってか、歌の意味が分からない来園者を放っておかず、歌の解説もしたことがあったそうです。ある日自分が事務室で仕事をしていると、歌の意味を間違えている学生たちの話し声が外から聞こえ、思わず飛び出して学生たちに講釈をしてあげたとっています。

1968(昭和43)年に、残念ながら植物園は廃止となりましたが、民子自身にとっても、この万葉植物園は十年以上運営に関わった思い出深い場所だったようです。



©仲佳